

園番号 704

令和7年度 奈良市立都跡こども園 研究実践概要

園長名 近江 弥生
全園児数 126名

1. 研究主題 自ら遊びを創る子どもを育む
～ 子どもの育ちや学びから要因を探る ～
2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

本園では「子ども自ら遊びを創る」ことを大切に継承している。前年度までの研究の成果と課題を踏まえ、自ら考え表現し、試行錯誤しながら遊びを進めていく姿につながるよう、遊びを創る過程において、どのような要因で遊びが創られ、育ちや学びを生み出しているのかを検討することで、子ども理解を深めていきたいと考えた。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

遊びの中で、子どもの育ちや学びを読み解き、それを生む要因を検討して、保育に反映することで、自ら遊びを創っていく子どもの育ちにつなげる。

②研究の重点

- ・研究主題について職員で共通理解し、子どもの姿を丁寧に見取る。
- ・各年齢の発達段階を捉え、育ちや学び、要因について語り合う。
- ・研修方法として、でいあシートやエピソード記録、遊びの写真などをもとに職員間で語り合い多角的な見取りができるようにする。

③活動の方法

- ・各学年の実践事例の遊びを創っている姿から子どもの学びや育ちを読み取った。また、その姿の要因となった事柄について検討し、以下のように表記した。

遊びを創っている姿 育ちや学び 要因

事例1 「バーベキューしよう」 3歳児10月

草花やツルムラサキの実を使ってごちそうづくりを楽しんでいると、①「バーベキューしたい」と言うA児。保育者がビールケースの上に網を置くと、A児とB児が②網の下に砂を盛り始めた。「火やで」「火いるねん」と言って砂を盛る様子を③周りにいた友達がじっと見ている。火に見立てた砂が小さな山状になった頃、④C児「焼きおにぎり焼くんだ～」と砂の入った型を網の上に置いた。保育者が近くの築山から落ち葉を拾って「これも焼けるかな?」と言うと、⑤D児も落ち葉を拾ってきて「お肉」と網の上で焼いていく。⑥C児とE児は、草の茎を拾ってきて、キャベツや白菜に見立てて網に乗せた。C児の隣に座るF児は「ジュージュウ」と言いながら網を見ている。

- ・自分のしたいことを伝える(①④)
- ・生活体験と遊びを結び付け、再現して遊ぶ(①②④⑤⑦⑧)
- ・必要なものを考えて、素材を持ってくる(②④⑤⑥⑦⑧)
- ・自然物を食材に見立てる(④⑤⑥⑧)

- ・BBQの経験、共有しやすいイメージ
- ・様々なものに触れて遊んできた経験

網の上がいっぱいになった頃、「もう食べてもいい？」と保育者が言うと、A児が⑦スコップを2本持ってきた。それらをコテのように持ち、葉を混ぜて、保育者が持ってきた皿に焼けたお肉を乗せると、「はい、食べてー」と嬉しそうに保育者に渡す。⑧食材を混ぜたり皿に乗せて自分で食べたりするB児、食べないけれど何度も落ち葉を取ってきて乗せていくD児、落ち葉のお肉を指先でカリカリと爪で削りながら「焦げを取っているの」と言うF児と、一人一人違うことをしている。「そろそろおにぎりも焼けたかな？」と保育者が言うと、C児「まだだよ！」と答える。それぞれが食べたり網に食材を乗せたりしていたが、「写真撮って！」というE児のリクエストに、「撮るよー」と保育者がカメラを構えると、カメラを向いて嬉しそうにする姿があった。

- ・友達の遊びに興味をもつ(③)
- ・友達と同じ場で遊ぶ心地よさを味わう(⑧)
- ・自分が安心して遊べる場を広げる(⑧)

- ・運動会等、クラスでの活動の経験
- ・保育者が遊びの場にいること



【事例1 考察】

経験したことのある“バーベキュー”が遊びになったことで、身近にあるものを使って自分なりのイメージや見立てで遊ぶ姿が見られた。これまでに砂や水、泥、泡、落ち葉、ドングリ等、様々なものや素材に触れて遊び、感覚的に性質や使い心地等を実感してきたことも、イメージを広げる一つの要因になっていると考えられる。

また、友達のしていることに興味をもち、使いたいものを持ってきて、遊びの場に加わる姿が見られた。ただ、直接的なかわりはまだ少なく、保育者がその場にいることで、安心して場に加わったり、やってみようとする気持ちにつながったりしていると考えられる。遊びを創り始めたこの時期には、友達への興味を認め、かかわる場をつくりながら、一人一人が楽しんでいることを受け止め、やりとりをしたり使いそうなものを用意したりする援助が効果的だと思われる。

事例2 「ねこねこねこ～のおいしゃさん♪」 4歳児1月

絵本『ねこのおいしゃさん』の話を読み聞かせをして、後日保育者が聴診器をつくっておくと、嬉しそうに聴診器をつけ、友達と体に当て合っていた。保育者が「頭が痛いです」と言うと、A児が頭に聴診器を当て、「熱がありますね」と言う。保育者「どうやって治してくれますか？」と聞くと①A児「気合をいれましょう」と言い、「ねこねこねこ～のおいしゃさん♪」と歌い始めた。保育者「治りました！ありがとうございます」と言うと、②A児は近くにあった紙を四角に切って「熱冷ましシートを貼りましょう」と保育者のおでこにテープで貼り付けようとする。その様子を見た③B児は紙に薬の絵を描き、「薬もあげます」と保育者に見せた。

- ・絵本の話の思い出してなりきろうとする(①⑤⑦)
- ・友達と一緒にお話遊びを楽しむ(⑤⑦)

- ・絵本『ねこのおいしゃさん』をクラスで読み聞かせしたこと
- ・絵本の中に出てくる楽しい歌
- ・聴診器があったこと
- ・同じように遊ぶ友達

その後④A児は、ねこのおいしゃさん用の椅子と患者用の椅子を向かい合わせに並べ、⑤ねこのおいしゃさん役のA、B、C児「次の患者さん、どうぞ」と言って座ると「足が痛いです～」と患者役のD児がやってくる。A児「骨折してます」と言いながら聴診器をD児の足に当てる。するとA、B、C児「ねこねこねこ～のおいしゃさん♪」と歌い、A児「絆創膏つくりたい！」と保育者に話す。A児「待っててね」とD児に声をかけ、⑥保育者と一緒に画用紙を選びはさみで切って絆創膏をつくり、D児の足にテープで貼ってあげていた。その後も⑦お腹を痛めた患者役の子どもに「キャンディ

- ・必要なものを身近にあるもので表現しようとする(②③④⑥⑧)
- ・自分の思いを保育者に伝える(⑥⑧)

- ・子どものイメージや思いに寄り添い、一緒につくる保育者
- ・子どもが自由に使える素材

一の食べすぎですね～」と言って注射をしたり、⑧のどを痛めた患者役の子どもには保育者と一緒に素材の棚からカップ麺の容器を探して持ってきて、「（聴診器に使っていた PP ロープ）これうどんにしたい」と言い保育者と一緒に切って入れ、画用紙できつねのあげや具材などを切ってつくり「のどにやさしいうどんをどうぞ」とやりとりしたりしながら楽しむ姿があった。



【事例2 考察】

以前から楽しんでいた病院ごっこが、クラスで絵本を読み共有することで、さらに広がるのある遊びへと発展した。絵本に出てくる歌も相まってより楽しむ姿につながったと考える。また、患者さんを気合で治し、その後何かを渡すという絵本の物語が共通認識されたことで、「みんなが知っているお話」という安心感があり、友達と一緒に遊びを進めていきやすくなったと捉える。さらに、なりきったり、再現したりするために必要なものを自分たちでつくり出すことができるように保育者が寄り添いながら、素材を準備し、一緒に探したり、つくったりしたことも、もっとしたい！という好奇心につながって、より主体的に遊びを創り出す姿につながったと考える。

事例3 「どうなっているのかな」 5歳児1月

冷え込んだ朝、タライの水が凍っていたことに気づいた子どもたち。①触ったり、持って氷越しに友達を見たり、集めたりして思い思いに氷に触れて楽しんだ。②割れた氷を集めて砂をまぶし“きな粉餅”づくりをしていたA児が、片付けの時間になり、③「明日も寒いってお母さんが言ったから、このまま置いておいて、“きな粉餅”がどうなっているか見たい」と言い、そのまま置いておくことにした。降園前に様子を見に行くと氷が溶けて泥水になっていた。④「晴れてきたから溶けたんや」「でも、明日また凍るかもしれないから、このままにしておこう」と、置いておいた。

さらに冷え込んだ翌日。前日の“きな粉餅”は、ボウルやお茶碗の中で再び凍っていた。A児「全部凍ってるかな」「ひっくり返してみよう」と、ボウルを逆さにした。⑤「お茶碗の形に凍ってる!」「裏がツルツルしている」と、新たな発見を喜んだ。

⑥前日、「これも凍るかな?」と洗面器に水を入れて置いていたB児。「凍ってる!」「硬いな」「全部凍ってるかな」と、言いながら逆さにしてみると表面は凍っているが、底までは凍っておらず、じわじわと水が出てきた。氷の中から水が出てきて、底面と接する水がシャーベット状になっている様子を見て⑦「うわ!雪みたい」「キラキラしてる」「トゲトゲしてる」⑧「虫眼鏡で見てみたい」と、まわりの友達も興味津々の様子だった。実際に虫眼鏡で見ると「線が見えた」「雪の結晶が見えた」と、嬉しそうに話していた。

- ・自分なりの方法で氷に触れ、感じたことを言葉で伝える(①④⑤⑦)
- ・身近な素材を工夫してイメージを実現しようとする(②)
- ・起こった現象から原因を考えたり、不思議に思ったりする(④)
- ・自分なりに考えて試してみようとする(③④⑥⑧)

- ・タライやボウルなどにできた氷
- ・生活経験や知識
- ・同じことを楽しむ友達
- ・自然現象



【事例3 考察】

氷が溶けて泥水になってしまっても、また凍るかもしれないと考えたり、新たな氷をつくりたいと水を入れて置いておいたり、今までの生活経験や知識から自分なりに先の見通しをもっている姿が見られた。溶けた“きな粉餅”は泥水になって分離し、凍った時には表面は透明の氷で、ボウルの底と接している部分の泥水も凍っていた。そうした現象を見て、より自然の不思議さや面白さを感じたことも遊びを創るきっかけになったと言える。また、想像していなかったことにも面白さを感じ、さらに興味が深まっていた。友達同士で気づいたことや不思議に思ったことなどを伝え合うことも要因となり、次にどうしたいかを自分たちで考えながら遊ぶ姿にもつながったと考える。

5. 研究の成果

3歳児が遊びを創り始める段階では、身近にある素材や砂・水などの自然物を使っており、目についたものをきっかけに遊びたい気持ちが生まれていると捉えた。その触れたものから感覚的に性質や特徴を感じることで、気になることや不思議に思ったことをさらに深めていく土台となるのではないかと予想する。また、生活の中で見聞きしたことなどの生活体験も遊びを創る要因となっており、自分が実際に体験していることで模倣しやすいことがその理由ではないかと考えられる。

そして、保育者の見守りや共感等があることで、子どもは安心して遊び、周りの様々な物事に目を向けて遊びが広がっていった。自分のしていることや気持ちが整理されることも3歳児には必要であり、保育者のかかわりは遊びを創る要因の一つと考えられる。

4歳児は、経験が積み重なってきているが、まだ、一から遊びの中で自ら活かして何かをつくり出すことは難しいことが多い。そのため、子どもが自由に選び、使える素材を整えておく環境構成や保育者の声かけがあることで、子どもが遊びを創り出すきっかけになると考える。そのきっかけを通し、積み重なった経験や知識が表出され、自ら遊びを創り出していこうとする。その経験からくる手ごたえや楽しさ、自信は、充実感を生み出し、さらなる興味関心や遊びを創り出すことにつながる。

共通経験で友達のしていることを知ることも遊びを深めていく要因となっていた。他の遊びの場面での姿からも広すぎない環境が、他児の遊びへの興味をもつことにつながり、遊びを一緒に創り始めるきっかけになっている。

5歳児はこれまでの経験や知識から、自分なりに見通しをもち、実現させながら遊びを進めている。身近な現象への興味や身近な素材、用具を活用しイメージする力が遊びを創る要因となっていると言える。また、予想になかった事象にも面白さを感じる姿からは、様々な物事への好奇心が感じ取れる。予想する力、予期せぬことを受け止める力も遊びを進めることにつながっていると考える。そして、保育者が遊びの一員となり、整理する必要はあるが、友達と気付きや不思議さを共有し、意見を出し合う姿がよく見られている。言葉でイメージや考えを伝え合うことも盛んになり、友達と一緒に遊びを進めていくことが容易になるため、友達とのかかわりが遊びを創り、深めていく要因の一つになると考えられる。

6. 今後の課題

遊びを創る要因としては、大きく分けて保育者や友達などの人の存在と生活体験や素材などの環境面が挙げられた。この要因をさらに詳しく分類することで、遊びの場の構成に必要なものや援助の在り方が具体的に見出されることが予想される。それらを実践に移し、自ら遊びを創り深めていく子どもの育成につなげていきたい。